

口に保全といってもいろいろなアプローチがあることに気づくと思う。この中から自分の興味の向くものを見つけてもらえればと思う。

高木憲太郎  
(バードリサーチ)

In the company of Crows and Ravens

Marzluff, J. M. & Angell, T. 408 頁  
2007 年 6 月, Yale University Press, \$18  
ISBN-13: 978-0300122558

いたずらっぽい眼差しをした小柄なカラスがトウモロコシの上にちょこんと乗っている。何か意味ありげな白いカバーである。

本書は動物行動学で著名な B・ハインリッチの弟子の J・マーズラフが執筆し、T・エンジェルが挿絵を担当している。マーズラフはハインリッチと共に米国メイン州の山中で過酷な冬の観察や実験を行ない、ワタリガラスの社会を明らかにした。また、マツカケスの生態と種子散布に関する研究も有名である。現在は、ワシントン大学でシアトル周辺の都市に生息するカラスの生態を研究している。T・エンジェルの挿絵は洗練されているとは言いがたいが、オーデュボンの絵を彷彿とさせるような味わいがあり、いかにもカラスらしい姿態をとらえていて、長年カラスを観察してきた人でなければ描けないと感心する。

カラスに関する本はかなりの数にのぼり、その生態と共にたいてい人類の文化に登場するカラスの事例なども取上げられている。しかし、本書でマーズラフが唱える「カラスと人類の文化的共進化」という仮説は異色である。カラス嫌いの人なら目をむきそうな話だが、文化人類学的な進化過程と共に披露される考察には説得力がある。

ワタリガラスとオオカミの密接な相互関係は有名だが、初期の人類がアフリカで進化して間もない時期から、カラスの祖先も同様に人類とつかず離れずの関係にあっただろう。その後、狩猟採集期の人類はカラスを狩猟の神と讃え、牧畜期には許容の対象、農耕期に至ると盗人の汚名を着せて、忌み嫌うようになった。カラスを追い払おうとする人間の努力がカラスの知能を発達させ、賢くなったカラスに対抗するために、人類はさらに生活上の工夫を重ねてきた。こうして人類の文化の少なくとも一部はカラスと共進化してきたという。現在でも、カラス避けグッズを開発して特許をとり、金儲けする人もいるので、マーズラフの仮説にはうなづける。

一方、人間がカラスに与える影響は計り知れないものがある。世界のカラス類の中で都市に適応したイエガラス、アメリカガラス、ハシブトガラスなどは数が増え、反対に人と共存できない種は絶滅の淵に追い込まれている。危惧されていたハワイガラスは 2002 年 9 月についに野生絶滅し、グアム島のマリアナガラスも保全努力でかろうじて命をつないでいる。人類は生息地の改変や移入種の導入によって、地域固有の種を絶滅に追い込む一方で、都市型のカラスを増加させていく。将来は、世界のカラスは種数が減って、コスモポリタンな「超カラス」だけが繁栄するようになるかもしれない。

9 章からなる本文では、今日のカラス研究があまり紹介されている。例えば、カラスの社会はマーズラフが得意とする分野であり、個体識別をしたカラスの研究はまだ少ないわが国でも、何とかその社会を垣間見たいと意欲が掻き立てられる。また、カラスに文化があるかという問いには、行動学・社会学などの定義ともつき合わせて持論を展開していて、読み応えがある。因みに、マーズラフはカラスにおける「文化」を「社会的学習によって群れのメンバーに共有される知識と伝統」と定義しており、社会的に取得した行動は基礎的な文化要素と考えている。

北米にはワタリガラス、アメリカガラス、ヒメコバシガラス、ウオガラスなどのカラス属が生息している。そのうちアメリカガラスは旧北区のハシボソガラスと 95% まで遺伝子を共有することから異論はあるものの最も近縁とされている。化石記録の証拠から、ハシボソガラスが 2~300 万年前頃にベーリング陸橋を渡って北米に入り、その後多様化したのだらうという。人類が北米に到達するのはこれより少し後なので、カラスは人類がベーリング陸橋を渡って来てあっという間に南へ広がっていくのを見ていたことになる。これに対して現在、ロシアのクリュコフらによって極東のカラス属の分類関係の研究が始まっており、その進展が期待される。

付録の資料も充実していて、カラスの観察法や研究への助言から児童書の紹介まで載っており、至れり尽くせりである。世の中に野生動物がいることを理解できない「超都会人」が増えているわが国でも、こうした統合的な視点でカラスという「野生動物」を見ていく動きが盛んになることを願う。

黒沢令子  
(北海道大学低温科学研究所)